

西野々古墳群 確認調査概要

—府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う確認調査—

令和5年3月

大阪府教育委員会

序文

令和元年より府営農村総合事業「伏見堂地区」に伴って実施しています本府文化財保護課の試掘・発掘調査は3年目になりました。当地区では古くは縄文時代、弥生時代の遺物が出土しており、それ以降古墳時代では6世紀代に東方の山腹に築かれた田中古墳群とともに、石川右岸段丘面に西野々古墳群の数基の古墳が今もその墳丘をとどめています。

今年度はこの古墳群の遺存状態を確かめるべく、墳丘周辺において確認調査を行うこととなりました。本書に報告する調査結果は、これまでの知見に新たな成果を追加できると考えています。

調査の実施にあたっては、地元関係者ならびに富田林教育委員会、大阪府環境農林水産部の方々に、多大なご理解とご協力をいただき、深く感謝申し上げます。

今後も文化財の保護、活用に全力を尽くす所存ですので、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和5年3月

大阪府教育庁文化財保護課長
稲田 信彦

例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府環境農林水産部の依頼を受けて令和3年度に実施した、府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う、富田林市伏見堂所在の西野々古墳群の確認調査報告書である。
2. 確認調査は文化財保護課調査事業グループ主査 西川寿勝を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ専門員 藤田道子を担当者として実施した。
4. 令和3年度の調査番号は21040である。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行った。
6. 本書の執筆及び編集は文化財保護課調査グループ課長補佐 関真一・岡田賢・耕本哲が行った。
7. 確認調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
8. 確認調査にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力をいただきました。

富田林市教育委員会、大阪府環境農林水産部南河内農と緑の総合事務所、伏見堂自治会（順不同）

9. 確認調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府環境農林水産部及び教育庁が負担した。

凡例

1. 本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理座標第VI系）に基づき、方位針は座標北を示す。水準値はT.P.値（東京湾平均海面）を用い、本文および挿図中ではT.P.+○mと表記する。
2. 遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。
3. 土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 / 2006年度版）に拠る。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 調査の成果	3
第1節 1号墳(明八塚)周辺の調査区	3
第2節 2号墳(千代塚)周辺の調査区	7
第3節 4号墳周辺の調査区	7
第4節 古墳周辺以外の調査区	7
第3章 調査のまとめ	14

報告書抄録

挿図目次

図1 調査地位置図	1	図12 トレンチ9北東～南西断面図	9
図2 トレンチ位置図	2	図13 トレンチ16平面図・南北断面図	10
図3 1号墳周辺の調査区	3	図14 4号墳周辺の調査区	11
図4 トレンチ2東西断面図	4	図15 トレンチ10東西断面図	11
図5 トレンチ3東西断面図	4	図16 トレンチ11東西断面図	12
図6 トレンチ4東西断面図・平面図	5	図17 トレンチ12南北断面図	12
図7 トレンチ5南北断面図	6	図18 トレンチ13東西断面図	12
図8 トレンチ6南北断面図	6	図19 トレンチ14東西断面図	12
図9 2号墳周辺の調査区	8	図20 トレンチ1東西断面図	12
図10 トレンチ7南北断面図	9	図21 出土遺物実測図	13
図11 トレンチ8南北断面図	9		

図版目次

図版1 1号墳(明八塚)・2号墳(千代塚)全景	
図版2 トレンチ1・2・3・4断面	
図版3 トレンチ5 断面	
図版4 トレンチ6・7断面	
図版5 トレンチ8・9断面	
図版6 トレンチ10・11断面	
図版7 トレンチ12・13断面	
図版8 トレンチ14・16断面	
図版9 出土遺物 1	
図版10 出土遺物 2	

第1章 調査に至る経緯と経過

本調査は、令和元年に大阪府環境農林水産部耕地課と大阪府教育庁文化財保護課の間で行われた、府営農村総合整備事業「伏見堂」に伴う事業地内の埋蔵文化財の取り扱い協議に端を発している。その中で事業地に西野々古墳群その他周知の埋蔵文化財が含まれることから、本課は環境農林水産部に対し、埋蔵文化財の有無を確認する目的で試掘調査、確認調査を実施するよう指導し協力を求めた。そして同部より依頼を受けて令和元年に試掘・確認調査を行なった結果、古墳群以外にも中世の建物跡など集落跡の一端が検出され、その範囲も周辺に及ぶことが判明した。この結果に基づき令和2年9月に文化財保護法第97条の発見通知が環境農林水産部より提出され、新たに「西野々遺跡」として「周知の埋蔵文化財包蔵地」に加えられるところとなった。

以上のような経緯から、令和3年度は古墳に近接する休耕地における遺構の有無を確認するために令和3年10月より令和4年1月にかけて確認調査を実施した。調査は、墳丘周辺の周溝の有無と埋積土の状態を観察するために、各古墳に隣接して基本的に $2\text{ m} \times 5\text{ m}$ のトレーニングを設定したが、堆積状況を詳しく把握するために延長するなど形状を変更したところもあり、結果として14箇所のトレーニングを設定した。

調査は現耕土を小型重機によって除去し、それより以下は人力にて層毎に遺物の検出に注意しつつ掘り下げ、各層上面を精査し、遺構・遺物の有無を確かめた。掘削後はトレーニング壁面を清掃し、分層を行ない、写真を撮影後、実測図を作成した。



図1 調査地位置図（国土地理院発行2万5千分1地形図に加筆）

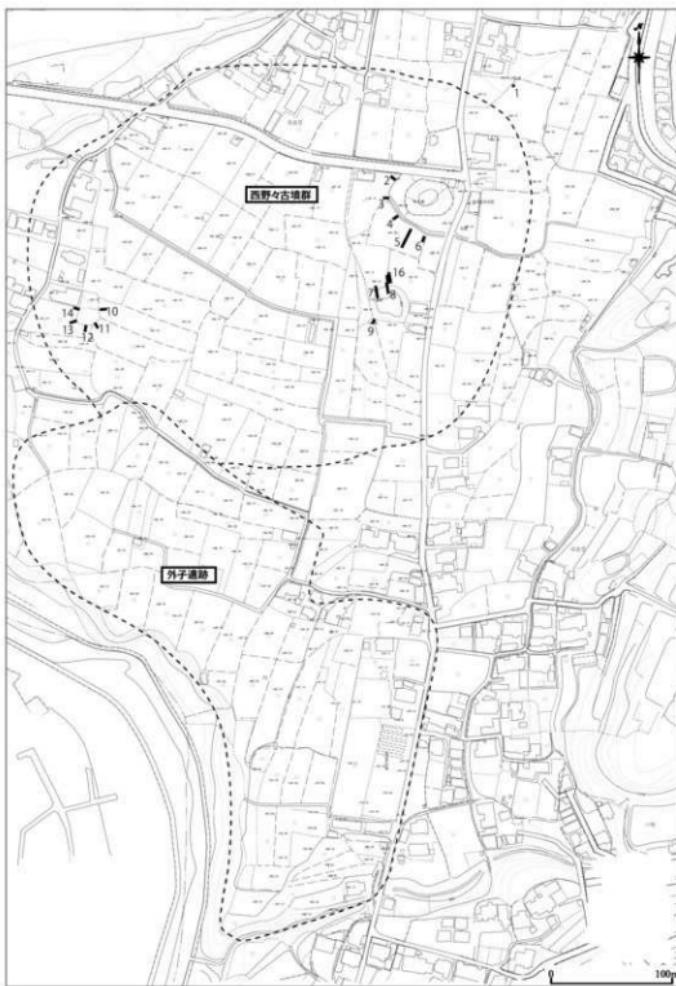


図2 トレンチ位置図

第2章 調査の成果

1号墳（明八塚古墳）は、古墳群の北端に位置し、直径約40mの墳丘が残存する。現水路を挟んだ地点に5箇所のトレンチを設定し、各トレンチの中世～現代の土層より中世～近世・近代の土器類が出土した。これに対して2号墳では3箇所のうち1箇所、4号墳では5箇所のうち3箇所から遺物の出土があったが、古墳に関連すると思われるものはトレンチ5の円筒埴輪片1点に過ぎない。

第1節 1号墳（明八塚）周辺の調査区（図3）

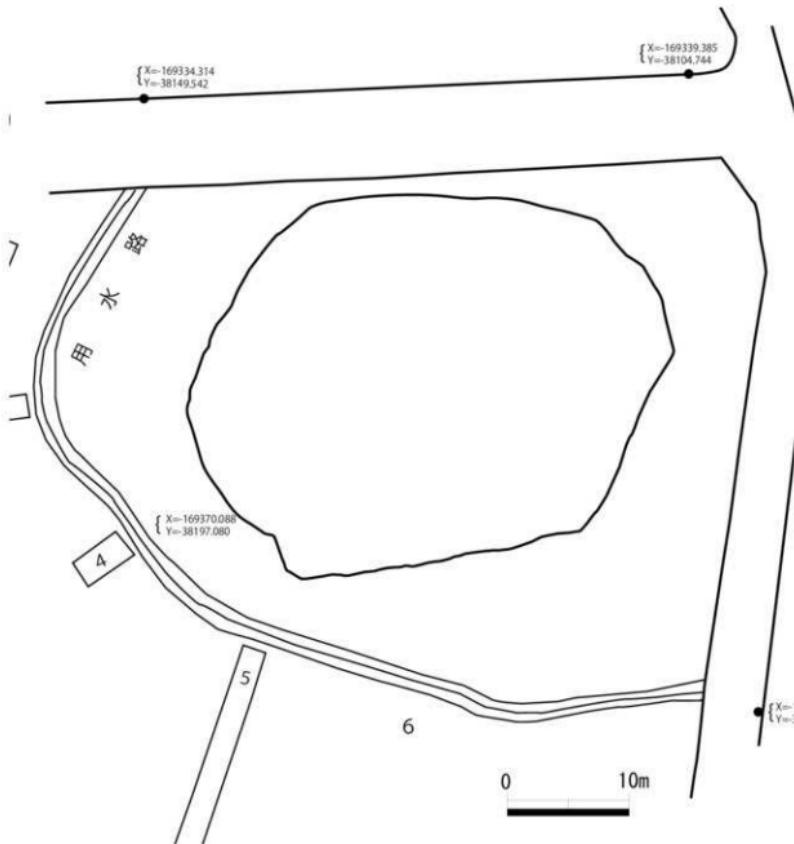


図3 1号墳周辺の調査区

現水路の西側に接して5箇所にトレンチを設定した。うちトレンチ5は下層の堆積状況を観察する目的で南へ延長し、結果全長17mとなった。

トレンチ2(図4) 2×5mのトレンチである。耕土・床土以下に中世耕土層(第4~7層)がほぼ水平に堆積する。それより以下は礫を含む粘質土や砂質土である。第1~5層まで土師器碗・皿片(図21-1・2)や瓦器碗片が少量出土した。

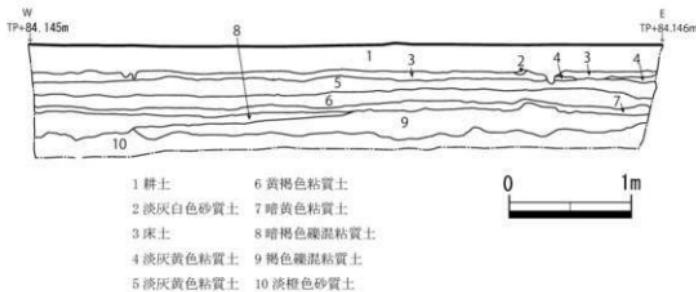


図4 トレンチ2 東西断面図

トレンチ3(図5) 2×5mのトレンチである。耕土・床土以下に中世耕土層(第3~4層)がほぼ水平に堆積する。トレンチ2の堆積状況とほぼ同じである。第4層から瓦質鉢の口縁部片(図21-3)が出土した。外面にヘラケズリの痕跡がある。

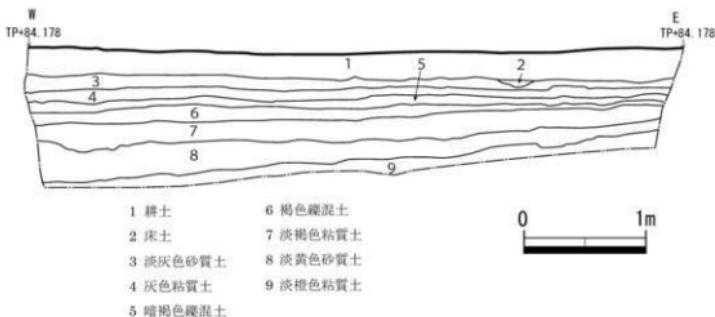


図5 トレンチ3 東西断面図

トレンチ4(図6) 2×5mのトレンチである。耕土・床土以下に粘質土・礫混じり土が堆積するが、第4・5層は現用水路以前の古い水路の堆積土とみられる。第3・4層から須恵器片、土師器片が出土しているが細片のため器種等は不明である。

トレンチ5(図7) 2×17mのトレンチである。耕土・床土の下に第3・4層の中世耕土層があり、このレベルまではほぼ水平な堆積を示している。それ以下の土層は礫を含み土石流の痕跡と思われる。第6層はその激しい土石流の堆積後に一帯を均一に覆う砂を主体とする土壤で、その後に耕作地としての土地利用が始まったと考えられる。第3～5層より遺物の出土があった。図化できたのは円筒埴輪片1点(図21-8)、須賀鉢片1点(図21-4)、土師質小皿片3点(図21-5～7)である。円筒埴輪片は淡橙色の須賀質で、低平なタガが付き6世紀前半とみられる。土師質小皿(図21-5)は平たい底部より口縁部が短く斜めに立ち上がる器で、13世紀代とみられる。その他細片では高台底部を辛うじて残す13世紀後半とみられる瓦器碗底部片のほかに、前述の土師質小皿、それに土師器壺または壺がある。

トレンチ6(図8) 2×4mのトレンチである。耕土・床土以下に礫を含む土層が堆積する。うち第3・4層は現用排水以前の古い水路の堆積土とみられる。床土より須賀器環、土師器の細片が出土している。

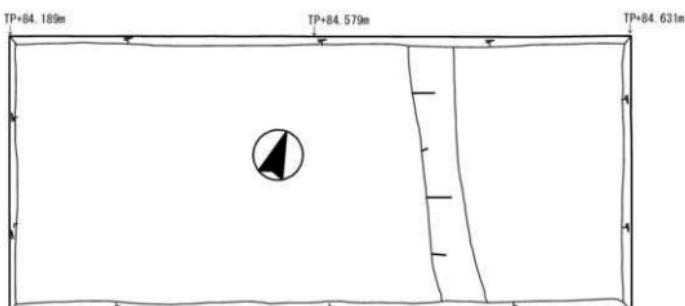
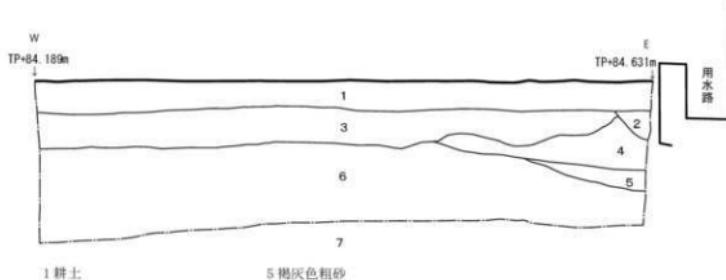


図6 トレンチ4東西断面図・平面図



図7 トレンチ5南北断面図

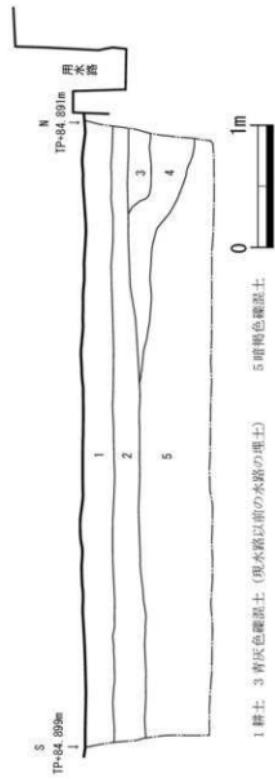


図8 レンチ6南北断面図

第2節 2号墳（千代塚）周辺の調査区（図9）

2号墳は直径約30mの墳丘が残存している。トレントを墳丘北側に2箇所、南側に1箇所設定した。さらにトレント8の北東部の堆積土を詳しく観察するためにこれを北へ拡張し、別にトレント16とした。

トレント7（図10）及びトレント8（図11）は2×9mのトレントであり、耕土直下で礫土を確認し、一部下層確認のため掘り下げた。遺物は出土していない。

トレント9（図12）2×4.2mのトレントである。耕土・床土・砂礫土（第1～3層）の水平堆積以下に褐色砂礫土（第4層）の落ち込みがみられる。その基盤となるのは黄色系の粘質土（第5層）である。土石流に起因すると思われる褐色・暗褐色系の礫土が堆積する2号墳北側一帯の堆積状況とは違っている点が注意される。第4層から陶器片が出土している。

トレント16（図13）トレント8の北側に拡張して、同地点の堆積土についてより詳しく観察する目的で設定した4×9mのトレントである。耕土・床土以下は礫土であるが、南端で南に落ち込む状況（第4層）が確認された。北の肩を捉えただけであるが、トレント内では東辺1m、西辺で0.7mを確認し、ほぼ東西方向である。耕土・床土より瓦器碗片、土師器片が出土している。

第3節 4号墳周辺の調査区（図14）

4号墳は東西約20m、南北約15mの墳丘が残存しており、墳丘周囲に計4箇所のトレントを設定した。現用水路の東側の2箇所を除き、3箇所は墳丘裾際までトレントを設定した。

トレント10（図15）2×5.4mのトレントである。耕土・床土以下は礫土である。浅いレンズ状の堆積土がみられた（第3層）。第1・2層から近世・近代の陶磁器片が出土している。

トレント11（図16）2×5.2mのトレントである。耕土以下はすべて礫土である。出土遺物はない。

トレント12（図17）2×5.5mのトレントである。耕土以下はすべて礫土である。墳丘裾では墳丘盛土より削れた石が混じる。出土遺物はない。

トレント13（図18）2×5.7mのトレントである。耕土以下は礫土で、墳丘裾付近では削れた土・石が混じる。出土遺物はない。

トレント14（図19）2×5.1mのトレントである。耕土・床土以下には褐色系の土が堆積するが、墳丘裾に至っては耕土直下に北へ隆起する礫土が露呈する。耕土中より土師器細片が出土した。

以上5箇所のトレントの墳丘に接する部分では、いずれも締まりのない砂・礫を主体とする盛土の立ち上がりが観察された。

第4節 古墳周辺以外の調査区

伏見堂公民館の北約100メートルの水田に1箇所トレントを設定した。

トレント1（図20）2.5×2.5mのトレントである。耕土・旧耕土・床土以下に中世耕土層とみられる淡灰褐色土（第4層）がある。同層より瓦器・土師器細片、土師質小皿片が出土している。小皿は平たい底部から口縁部が短く斜めに立ち上がる13世紀代と思われる器である。

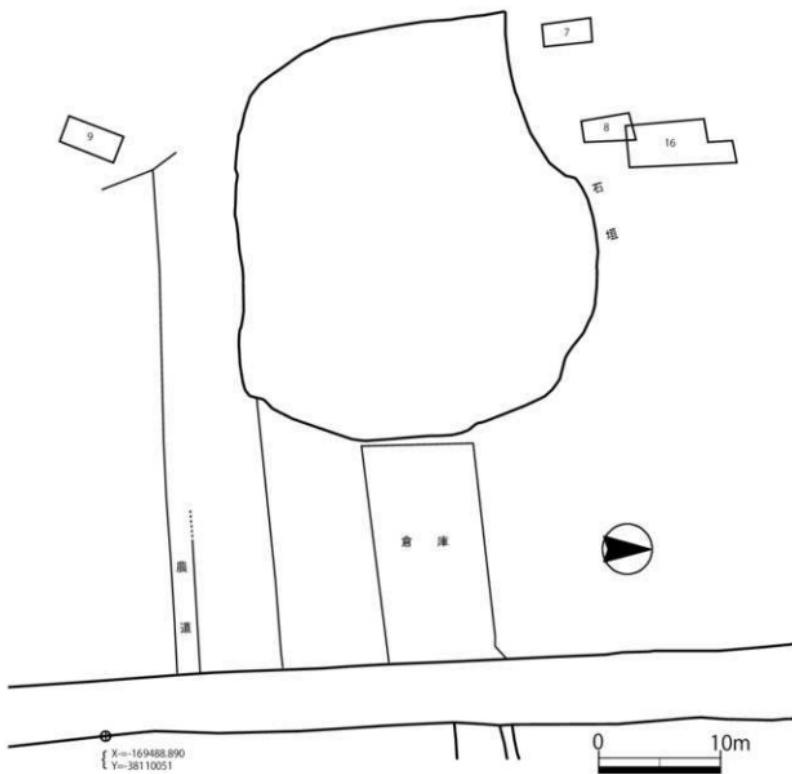


図9 2号墳周辺の調査区



図10 レンチ7南北断面図

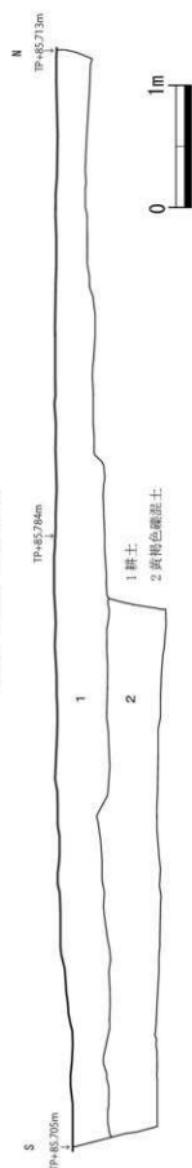


図11 レンチ8南北断面図

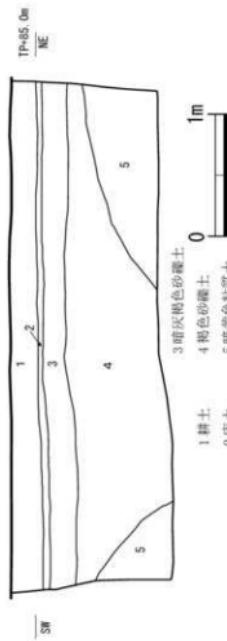


図12 レンチ9北東～南西断面図

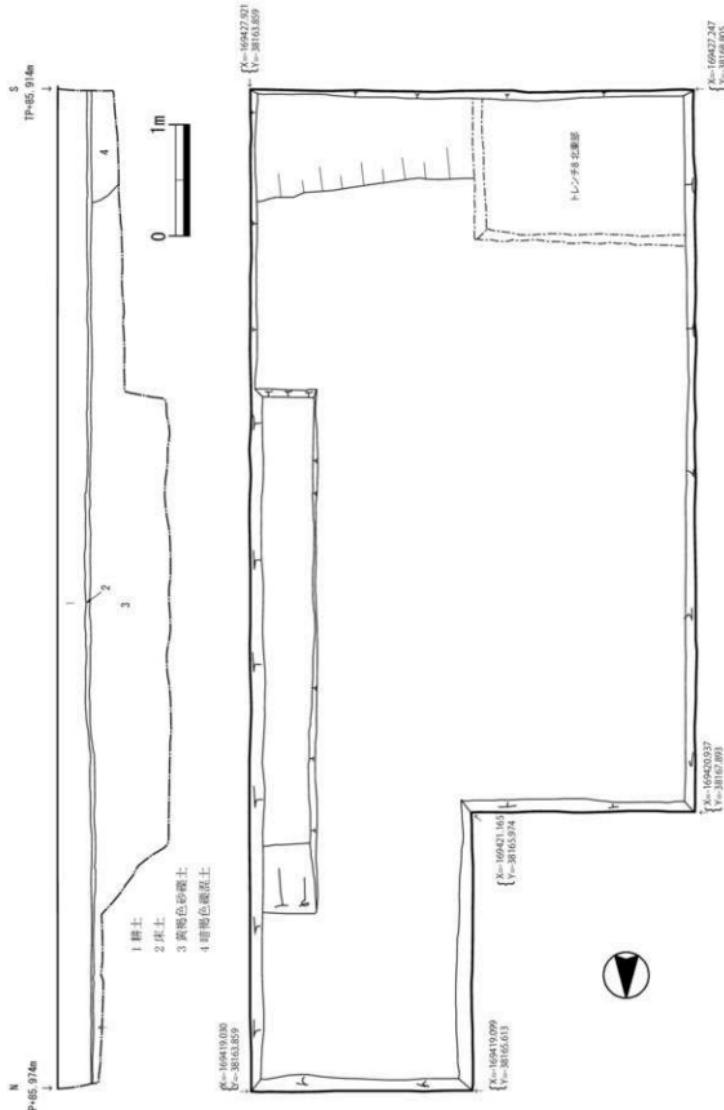


図 13 トレンチ 16 平面図・南北断面図

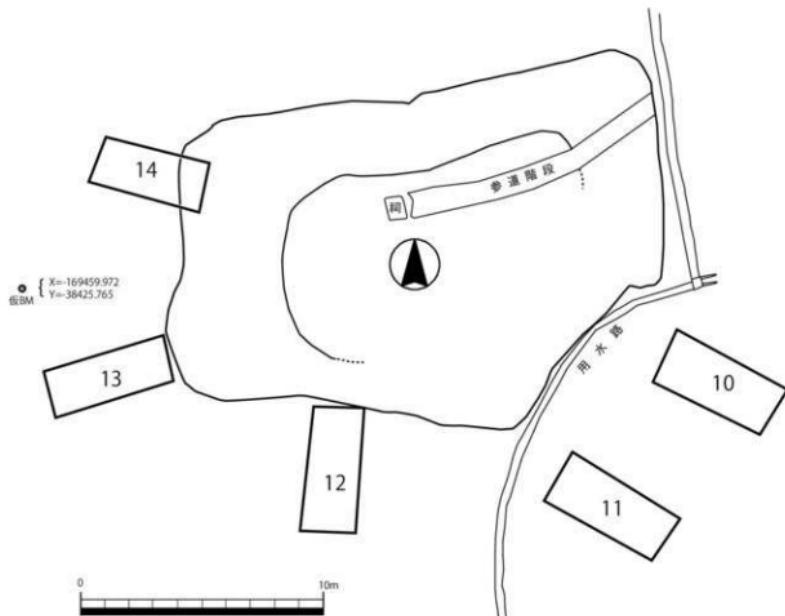


図14 4号墳周辺の調査区

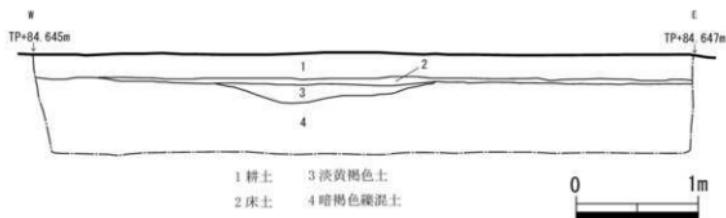


図15 トレンチ 10 東西断面図

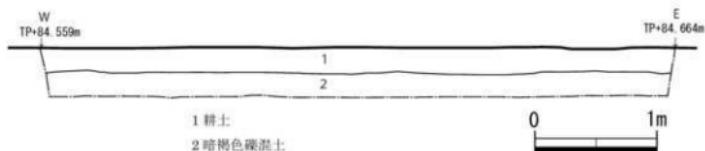


図16 トレンチ 11 東西断面図

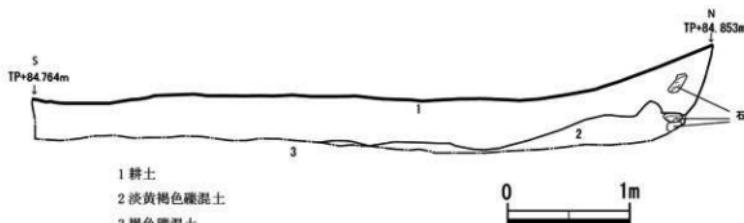


図17 トレンチ 12 南北断面図

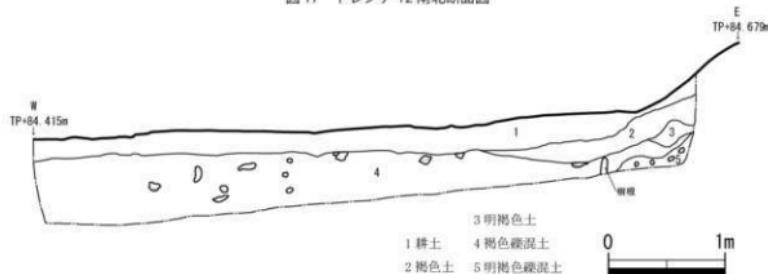


図18 トレンチ 13 東西断面図

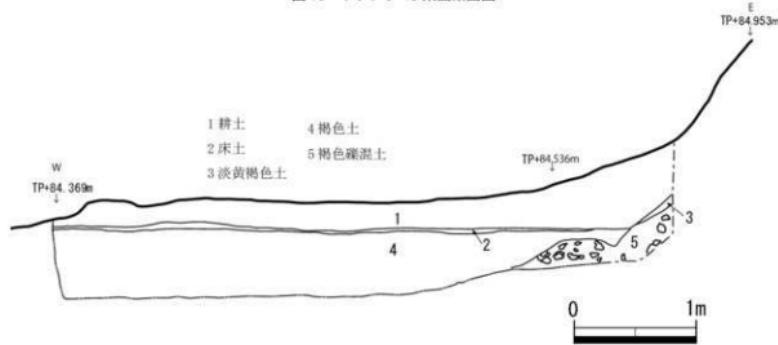


図19 トレンチ 14 東西断面図

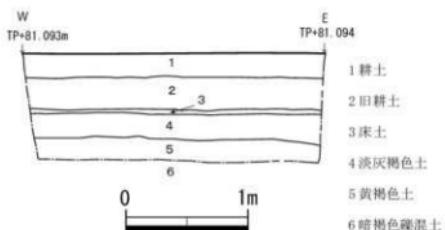


図 20 トレンチ 1 東西断面図

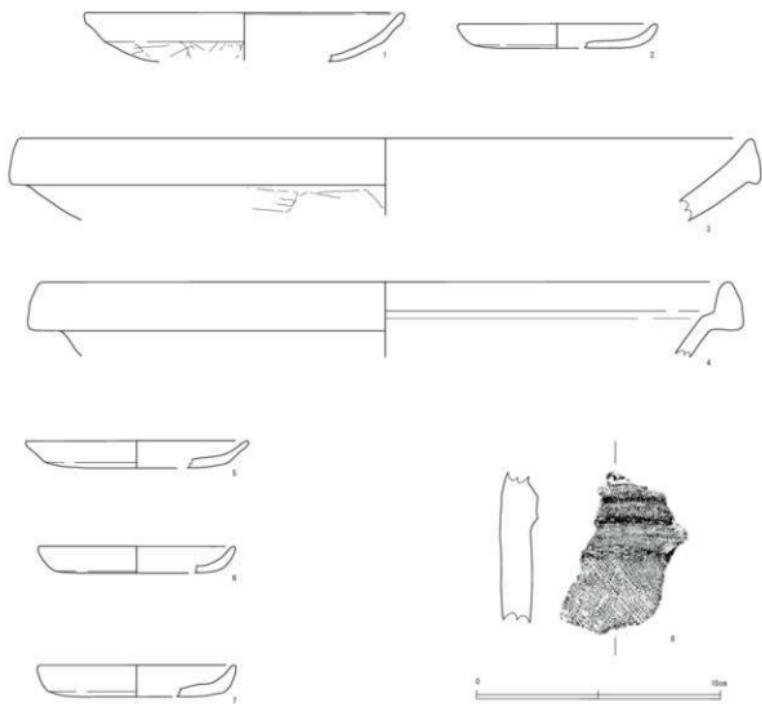


図 21 出土遺物実測図

第3章 調査のまとめ

今回の調査の結果は以下の諸点に要約される。

1. 昭和54年に行われた大阪文化財センターによる1号墳北側の調査では、周溝は幅6.5m、深さ0.8mという規模が推定されている。今回は現用水路を越えた南側において、墳丘に直行する形で6箇所のトレンチを設定した。

トレンチ4および6で現用水路以前の水路の南肩の一部が検出されたが、これが古墳周溝の位置を踏襲するものかどうか、確定はできない。一方、センター調査で確認された周溝基盤となる砂礫土やその上に堆積する黒褐色～灰褐色の砂礫・粘土と、今回の5箇所のトレンチで観察された中世耕土層以下の暗褐色～黒褐色の粘質土・礫土とが同じ層か検討するため、トレンチ5を南に延長してこれらの土壤の堆積範囲を観察した。その結果、中世耕土層から1点の埴輪片が出土したものの、それ以外に古墳に関連する遺物の出土はなく、暗褐色・黒褐色の粘質土・礫土の堆積はトレンチ南端まで及んでいた。おそらく中世耕土層以下のこの一連の堆積土は、すべて当地の氾濫平野が形成される過程で繰り返された土石流の痕跡と推察する。ただし、それは現用水路を挟んだ南側一帯に限った様相である点にも注意をおきたい。

以上、今回の調査では1号墳の周溝と判断される遺構は検出されなかった。周溝を検出したセンターによる調査では、設定されたトレンチは今回の調査区に比べ、より墳丘に近接した位置であることから、1号墳の様相を明らかにするには、現用水路より墳丘側の地点で調査を実施する必要があると思われ、今後の調査に期待したい。

2. 2号墳周辺では北側に3箇所、南側に1箇所のトレンチを設定した。北側のトレンチ8の拡張部(トレンチ16)では南端で黄褐色砂礫土を埋土とする落ち込みが検出された。このトレンチの東側では令和元年度の本府の調査によって幅4.5m、深さ0.7mの周溝と思われる遺構が検出されている。この落込みがその遺構に連続する可能性もあるが、断定はできなかった。

南側のトレンチ9では、暗黄色粘質土の地山に褐色砂礫土を埋土とする幅4.0m以上、深さ0.8m以上の落込みを検出した。ただし、古墳に関連した遺物は出土せず、周溝の存在を断定するにはいたらなかった。

3. 4号墳周辺では墳丘西側に2箇所、南側に3箇所のトレンチを設定したが、耕土・床上以下はすべて砂礫土であった。耕作土中よりトレンチ10では近世～近代の陶磁器片、トレンチ14で器種不明の土師器細片が出土している。トレンチ12～14では墳丘裾まで掘り下げたところ、10～20cm大の礫を多く含む締まりのない砂礫土の盛土の立ち上がりが観察された。この砂礫の盛土を古墳の封土とみることはできない。また周溝と考えられるような遺構も検出されなかった。

4. 古墳以外の地点では令和2年度の調査区の20メートル北に設定したトレンチ1で、耕土・床上下に中世包含層を確認した。遺構は検出されなかったが、包含層出土の中世遺物は前回調査の結果と矛盾せず、また包含層下の暗褐色土上面は前回検出された集落跡の遺構面に続くものと考えられる。

図 版

図版一
一号墳（明八塚）・二号墳（千代塚）全景



1号墳全景（南から）



2号墳全景（北から）

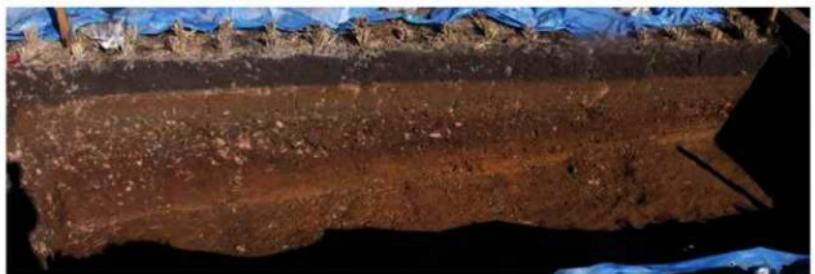
図版一
トレンチ一・二・三・四
断面



トレンチ1 北壁断面



トレンチ2 北壁断面



トレンチ3 北壁断面



トレンチ4 北壁断面

図版三 トレンチ五 断面



トレンチ5 全景（北から）



トレンチ5 断面細部（北半部）

図版四

トレンチ六・七
断面



トレンチ6 西壁断面



トレンチ7 東壁断面



トレンチ 8 西壁断面



トレンチ 9 西壁断面

図版六 トレンチ一〇・一一 断面



トレンチ 10 北壁断面



トレンチ 11 南壁断面



トレンチ 12 西壁断面



トレンチ 13 西壁断面

図版八 トレンチ一四・一六 断面



トレンチ 14 北壁断面



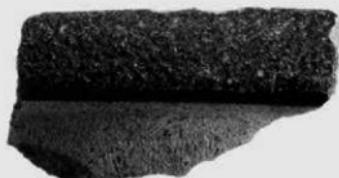
トレンチ 16 東壁断面



トレンチ 16 東壁断面



3

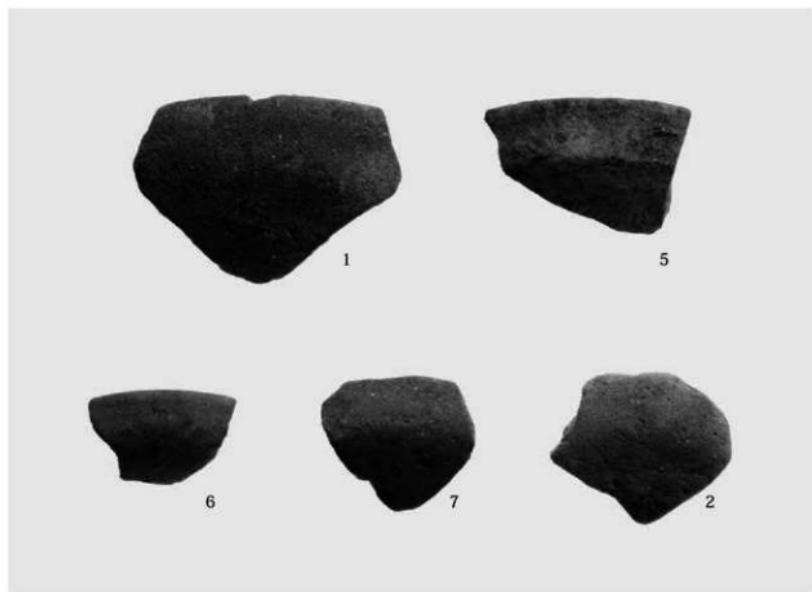


4



8

圖版一〇 出土遺物 二



報告書抄録

西野々古墳群確認調査概要
—府営農村総合整備事業「伏見堂地区」に伴う確認調査—

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06-6941-0351(代表)

発行日 令和5年3月31日

印 刷 株式会社 近畿印刷センター
〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号